

ぼうさい通信 35号



毎月16日は「防災教育啓発の日」

令和2年7月16日発行
熊本県立湧心館高等学校

大きな被害をもたらした「令和2年7月豪雨」

「あっという間に水かさが増えた。」

「朝3時半ごろ、ゴーッという激流の音で目が覚めた。2時間ほどで水が来て公民館に避難したけれど、もう怖かった。タベから寝ていない。家も2階まで浸かってしまって…。」

今月3日から4日未明にかけて降り続いた豪雨は県南部に大きな被害をもたらしました。河川の氾濫や堤防の決壊、土砂崩れが発生し、日常は一変しました。次々と映し出される映像に息をのみ、愕然(がくぜん)としました。私事ですが、義父が球磨郡に住んでおり、私自身も仕事で長く球磨郡に住んでいたこともあって、人吉の街には親しんでいま



した。「小京都」と呼ばれ、落ち着いたたたずまいを見せる街が痛めつけられた姿を目の当たりにして、胸が締め付けられる思いです。

また、葦北地域でも同様に豪雨による大きな被害を受け、生活される方々の日常が奪われました。被災された方々にお見舞い申し上げるとともに、無念の死を遂げられた方々に心からお悔やみを申し上げます。

通信制では、協力校として人吉高校と芦北高校でもスクーリングが行われていますが、芦北高校は氾濫した水が押し寄せ、しばらく復旧の見通しが立ちません。人吉高校は浸水を免れたものの、生徒の学習環境が整わないため、両校とも日常を取り戻すにはもうしばらく時間がかかりそうです。7月12日(日)に両校で予定していた通信制のスクーリングも中止となりました。現在、生徒の被災状況の把握や、教科書、レポートの確認など、学習環境の把握を行っており、生徒の置かれている状況をくみ取りながら、生徒が学びの生活に復帰できるよう努力をしているところです。

すでに、国や県、民間ボランティアによる支援の動きは広がっています。清掃などのボランティアの受け入れも始まっています。7月9日には県職員の有志が、汚泥処理や清掃等に必要ということで、タオル供出の



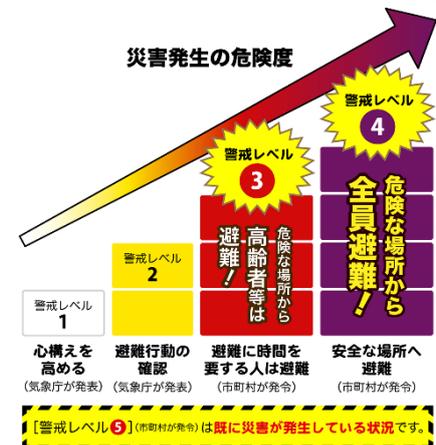
呼びかけがありました。同じ熊本県の人たちが今も苦しんでいます。皆さんも、身近に自分ができることを探し、積極的に行動を試みましょう。

近年の豪雨の特徴

7月4日には大雨特別警報が出され、「命を守る行動」が呼び掛けられました。「数十年に1度の大雨」という表現がされますが、最近、頻繁（ひんぱん）に出されるこの警報からも、防災のこれまでの常識が通用しなくなっていることがわかります。2014年の広島の大豪雨災害から「線状降水帯」という用語がにわかに有名になりましたが、今回の災害もこれが原因です。九州北部に停滞し続ける梅雨前線に暖かい湿った空気が流れ込み、局地的に豪雨をもたらす「線状降水帯」が県南部に形成されました。地球温暖化の影響で海面温度が上昇し、雨量の増大につながる水蒸気の大量発生が起きていると気象学者は主張しています。今回は毎秒50～60トンの水蒸気がこの「線状降水帯」に流れ込んだ計算となり、例えば、「アマゾン川の（流量）2、3本分の水が突然九州の南に現れた」という事です。「あつという間に水かさがました」と被災者が語るように、これまでの常識では測れない異常気象が発生しているのです。

避難スイッチ

そのような中、従来の治水や排水機能は、今後通じない状況も発生しうるのです。災害の起きる可能性については、段階を追って気象庁や市町村から発令されますが、世論調査では【警戒レベル3】の「避難指示」では45%の人が避難をしないそうです。人は皆、「自分は大丈夫だろう」と考えがちなのですが、そんな中、人が避難行動に移るきっかけを「避難スイッチ」と呼びます。それは、いくつかの要因が重ならないと入らないスイッチのようです。具体的には①気象情報や行政からの警報を知っている、②周囲の環境の悪化を確認した、③周囲からの避難の呼びかけがあった、などです。八代市坂本町鎌瀬集落では、近所で信頼の厚いお婆さんが「あぎゃん水のあがったとはみたこつがなか（②のスイッチ）、避難したがよか。（③のスイッチ）」と一軒一軒声をかけてまわったことが、集落全員の避難成功につながったそうです。



支援の動き

今回の災害に対する支援の動きが全国に広がっています。熊本県や被災した市町村では支援物資の受け入れや、災害義援金の募集を行っています。支援物資には足りているもの足りないものがあります。詳しくは各市町村のホームページで確認してください。



実際にボランティアとして行く、支援物資を送る、義援金を送る、募金をする、応援メッセージを送る……、皆さんにできることは何かあります。また、皆さんだからこそできることもあります。行動を試みましょう。

【文責 通信制防災担当】